

令和 5年 3月

後藤寛之 学位論文審査要旨

主 査 上 田 敬 博
副主査 山 元 修
同 八 木 俊路朗

主論文

Retrospective evaluation of factors influencing successful skin grafting for patients with skin cancer of the foot

(足部皮膚悪性腫瘍患者における植皮生着に与える因子の後方視的検証)

(著者：後藤寛之、吉川周佐、盛啓太、大塚正樹、面高俊和、吉見公佑、吉田雄一、
山元修、清原祥夫)

平成29年 The Journal of Dermatology 44巻 1043頁～1045頁

参考論文

1. Symptoms of and palliative treatment for unresectable skin cancer

(切除不能皮膚癌患者における出現症状と緩和治療)

(著者：後藤寛之、清原祥夫、進藤真久、山元修)

令和元年 Current Treatment Options in Oncology 20巻 34

2. Expression of Programmed Death-Ligand 1 in cutaneous squamous cell carcinoma arising in sun-exposed and nonsun-exposed skin

(露光部および非露光部に生じた有棘細胞癌におけるPD-L1発現)

(著者：後藤寛之、杉田和成、山元修)

令和2年 Indian Journal of Dermatology 65巻 506頁～509頁

審査結果の要旨

本研究は、足部への植皮生着に関する因子を調べ、植皮生着率改善のために必要な要因を検証しているものである。荷重部は非荷重部と比較して有意に生着率が低く、2期的に再建した方が1期的に再建するよりも生着率が改善するという見出しをした一方、タイオーバーの有無や固定期間、術後歩行開始までの日数や植皮面積は生着率には有意に影響しなかったことを報告した。また、1期再建でも2期再建でも、病変を切除してから治癒するまでの日数はほぼ同等であり、2期的に再建してもデメリットは少ないことを証明した。後方視的な研究であり、今後前向きな検証は必要と思われるが、生着が難しい足部への植皮において、影響する因子を見出した点で学術水準を高めたものと認める。